

教科学習に必要な言語能力のための指導の実践報告

第二言語としての日本語教育の現場から

大阪インターナショナル・スクール
太田垣明子

1 はじめに

外国人の子供達が「学校」という場で学んで行くには、日常的な会話能力だけでなく、「読み・書き」を含めた教科学習のための言語能力が必要であることが議論されるようになり、年少者のための日本語教育の現場でもその指導法が大きく取り上げられるようになってきた。

筆者の勤務するインターナショナル・スクールにおいても、子供達の日本語における学習言語能力をひきあげることと、学校の第一言語とされている英語で行われる他教科の内容の理解を日本語から理解させることを目指して、本学級で行われている内容を日本語クラスのカリキュラムに積極的に取り入れるよう努力をしてきた。

本稿では、小学部5年生のクラスにおける一つの実践例を、クラスで観察されたことや生徒の感想を織り交ぜながら、紹介する。

教科学習のための指導をどの段階で、だれが行うかという問題は、各学校の事情や生徒の置かれている状況によって一概に決めることはできない。しかしながら、本学級の担当との連携によって、第二言語教育の立場からできることを考えていった場合の一つの実践が、本報告である。

2 理論的背景

今回紹介する実践は、ESL（第二言語としての英語）教育における内容重視アプローチ（Content-based Approach）に基づいたものである。このアプローチは学習者が現在学習している教科の内容を第二言語学習に取り入れるというもので、(1)生徒の興味やニーズに応じたトピックを与えること、(2)生徒の慣れ親しんだ状況や場面の中で言語を学習する場を与えること、(3)言語の基本的な4技能（聞く・話す・読む・書く）だけでなく学習技能も育成すること、(4)将来の学習に備えて意味のある学習言語もプログラムの中で学習者に提供すること、が基本的な考えとして挙げられている。

3 「人間の身体」の授業

今回の実践が行われたのは、インターナショナル・スクールで日本語を第二言語として学ぶ5年生17名のクラスで、日本語のレベルとしては、「話す・聞

く」のに困らない日常会話能力およびひらがな・カタカナが理解できる程度の基本的な読み書き能力ができるというレベルの児童から、日本の同学年の小学5年生程度の日本語力を有するレベルの児童までが同じクラスに在籍している。このように同じクラス内での日本語のレベル差はかなりあるが、児童の方はそれをむしろ当たり前のことと受け取っておりお互いに助け合う姿勢があることと、教えるスタッフの体制上このクラスでは2人の日本語教師によるティーム・ティーチングが実施されていることから、レベル差によるクラス運営上の大きな問題は見られない。

5年生の日本語のプログラムは、週に45分のクラスが3回で、1997年の11月に「身体」のトピックを扱った。主な教室活動は以下のとおりである。

- (1) 身体の部位および働きに関するブレーン・ストーミング
- (2) 各器官の働きについて本を調べ、レポート作成
- (3) "The Skelton Inside You" (身体に関する児童向けの英語の本) の翻訳
- (4) 「弱くなった人間のからだ」(小学5年生向けの読み物) を読み、昔・今・未来の人間のからだについて検討

4 本実践に関する考察

今回の指導を通じて考えたことを、語彙指導の面と子供の反応の面から述べたい。

(1) 語彙指導

教科学習を考える際、学習用語の指導が大きな課題として挙げられる。今回の指導で気がついた点として、バイリンガルの子供に語彙を指導する際に、指導者は各語彙の2つの層を意識しなければならないという点が挙げられる。2つの層とは、「言語的な層」と「概念的な層」である。「言語的な層」はその語彙の発音や読み方で表面的なものであり、また日本語独自のものである。一方、「概念的な層」は、その語彙がどのような意味を持つかということで、この層の部分がきちんと理解されない限り、子供には知識として定着しないものである。しかし、この「概念的な層」は、もう一つの言語で基本的な概念が理解されている場合、「言語的な層」の部分を与えることで記憶につながる。例えば、「肺」と

いう言葉を教える際に、既に学習者が英語で「lung」を知っていたら、日本語では漢字で「肺」と書いて「はい」と読むんですよ、という指導ですんなり受け入れられる。

ただし、英語の「stomach」が日本語では「胃」と「おなか」の2つの意味があることもあり、必ずしも一対一の対応でない時は、「言語的な層」の指導として、教える必要がある。

(2) 子供からの反応

英語で勉強している内容を日本語でも勉強するということが、おおむね児童に評判が良かった。本トピックの最初の授業で、数人の児童が「あー、それ今英語でやってる！」といった発言が印象的であった。ある時は、「あ、これ英語の のことや！」という言葉を出したり、一人の児童がとなりの児童に英語でその項目について説明をすると説明を受けた児童はわかったという顔をしていることもあった。さらに、家庭での言語が日本語である、英語より日本語を得意とする子供にとっては、自分を見せる場を与えることになったようで、非常に積極的に取り組んでいた。年少者の第二言語教育において、学習者の動機を高めることは非常に大きな課題である。そのような意味においても、2つの言語から同じ内容を取り扱い、その概念を両言語からサポートすることの大切さを今回感じた次第である。

一人の児童は毎週週末に書いてくる日本語のジャーナル（一週間をふりかえっての日記）にこのように記している。

「今、クラスで習っている、人間の体を習うのは、とっても楽しいですよ。私は、人間の体が、どういうふうに変化をしているのかを勉強をみんなでするのは、とてもおもしろいです。（中略）今、英語でも同じ事を習っているから、いろんな言葉を、両方の意味で分かるから、勉強がやりやすいです。だから人間の事を勉強するのが楽しいです。」

4 今後の課題

最後に、実践の過程で気づいた課題を1つ挙げたい。今回の実践の途中まで、「日本語のレベルが初級から中級である子供は、みんな英語の方はきっと強いんだろうな。」という風に漠然と考えていたわけであるが、学級担任の先生と話をすると、数人の児童に関しては、英語力がかなり弱いということが明らかになった。第一言語も第二言語も弱い児童への指導を、第二言語指導の立場からどのように行えばよいのであろうか。これは、平成9年度の文化庁主催の「日本語教育協議会」の大阪会場の「年少者教

育」の分科会でもフロアから挙げられた問題点であり、年少者日本語教育に携わっている人々の共通の課題と言えるが、すぐに解決できる方法は今のところ見あたらないのが現状である。今後、この課題に関して、研究と実践の双方からの声が挙げられることを期待したい。

第二言語教育の現場の立場から、学校における教科学習のためにどのような指導が可能であるかという一つの例をここでは紹介した。

外国人の子供の本クラスへの道筋を作るため、教科学習用語や教科書の対訳表、放課後や学校外での子供の母語による指導、本クラスにおける補助指導等、様々な試みがなされていると聞く。本稿における紹介は、週数時間の日本語クラスにおけるある試みにすぎないわけであるが、「学校」という場において、2つの言語から子供の「考える力」を支える一つの具体例として、今後の材料になればと思う。

参考文献

- Genesse, F. (1992) *Educating Second Language Children*, Cambridge University Press.
- Snow, M. A. (1991) "Teaching Language Through Content." in *Teaching English as a Second or Foreign Language*, edited by Celce-Murcia, M. Heinle & Heinle Publishers.